

# 飛 距 離

能村 研三

塞翁が馬の年

播粉木の根気を尽くす暮秋かな

誉め言葉割り引いて聞く煙草

濡れてなほ水引草の散らし紅

後手に閉める枝折戸今日の月

板わさは蕎麦屋の肴無月かな

霜降や当てなく延ばす祝ひ事

夕間暮れ菊人形に血の気さす

断崖へ飛距離を延ばす朴落葉

黒々と山襲しまり獵期来る

蕎麦湯乞ふ頃合ひなりしひとり席

二〇二〇年。東京オリンピックが開催されることと、「沖」が創刊五十周年を迎えることから、この輝かしい年に向かって何年も前から期待と希望を持っていた。年が明けて二月、糖尿病の検査数値が芳しくないため、検査教育入院を余儀なくされた。二週間余り病院に入院中、世の中ではコロナウイルスが徐々に蔓延し始め退院後も外出が出来ない自粛生活が始まった。病院では食事と生活習慣の指導を受けたが、これを実践するのには絶好の機会が、普段の酒量を抑えることと適度な運動を日課として続けたことで、正しい健康管理ができるようになり、検査数値も良好に回復した。

一同に会しての句会ほとんど出来なくなり、紙上句会が続いた。通信形式の句会では、直接人が集まれないが、淋しいが、普段句会に来られない人も多く参加してくれるので、この点は良かったように思う。

六月には待望の「沖」のホームページが開設され、情報を瞬時に多くの人に伝達できるようになり、コロナ禍で人と人との接触できない中、こうしたツールの有難さを改めて認

識した。

また、オンラインによる「沖」の打ち合わせや、地方の人たちと距離を越えての小句会が出来るようになったことも、これまでの日常では考えられないことである。

今年はいろいろな事が困難の中であったが、「沖」同人の方の句集で、齊藤實さんの『百鬼の目玉』、磯貝尚孝さんの『黄落』、宮坂秋湖さんの『夏椿』、河野美千代さんの『国東塔』、小原清江さんの『椰の木』、広海あぐりさんの『すみだの風』がそれぞれ出版されたことから、「沖」の間断のないパワーを感じることが出来た。

五十周年記念大会が来年に延期されたのが残念であったが、編集部が奮励努力により三百五十六ページの記念号を刊行できたことはすばらしかった。

いずれにせよ、今年も誰かが今までに経験したことのない年であったが、ある意味では塞翁が馬の年であったようにも思える。

来春は、私の千支の年となるが、五十周年の余勢をかって私の第八句集と『能村登四郎の百句』の刊行を予定している。

能村 研三